

## 展示品一覧

### ○ 大図（千葉県 九十九里浜・銚子・茨城県鹿島灘海岸）

#### 「自江戸至奥州沿海図 第五〈自井戸野／至滝浜〉」

国宝：地図・絵図類 番号61、縮尺36,000分の1、180×89.2cm

享和元年7月18日に井戸野（旭市）を出発してから、30日に滝浜（茨城県銚田市）に到着するまでの測量成果である。

大図の欄外には「自 井戸野 北 五尺一寸八分九厘四毛  
至 滝浜 西 五寸八分八厘」

と大図上の経緯の寸法が墨書されている。

測線は屏風ヶ浦を離れ利根川河口へと進んだ。19日には、嫡男の景敬や親族、親友の久保木清淵らが見舞いにかけてくれた。銚子では9日間をかけて富士山の方位測定に挑んだ。測量日記には「日々濛気おおくして見えざりき、此朝富士山を測得たり。そのよろこび知るべし」とある。右の学士院中図でも富士山へと方位線が引かれている。銚子での測量については、会報63号の宮内敏会員の「富士山の方位に拘った銚子測量の検証」が詳しい。



日本学士院中図から銚子

### ○ 大図（千葉県 九十九里浜）

#### 「自江戸至奥州沿海図 第四〈自御宿／至井戸野〉」

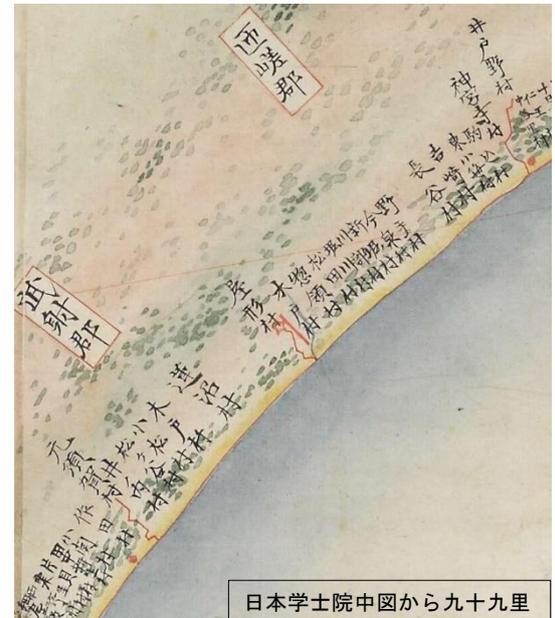
国宝：地図・絵図類 番号60、縮尺36,000分の1、169.3×88.3cm

享和元年7月12日に外房の御宿（夷隅郡御宿町）を出発し、大東岬から九十九里浜を進み、17日に井戸野につくまでの測量成果である。

大図の欄外には「自 御宿 北 五尺〇四分三厘  
至 井戸野 東 二尺三寸七分」

と大図上の経緯の寸法が墨書されている。

7月15日の測量日記には「霧深して方位尺取らず。… 細屋敷村、西野村。それより栗生村、片貝村、田中新生村、小関村。」と集落名を淡々と羅列している。しかし、実際には栗生村（九十九里町）では莫逆の友である飯高惣兵衛を訪れている。小関村（九十九里町）は忠敬の出生の地であり、16日の測量日記には「屋形村午前に着。止宿名主海保兵右衛門。此所より同郡小堤村へ立寄」とある。小堤村（横芝光町）は忠敬が10歳から17歳まで暮らした実家である。17日の測量日記は「井戸野村に着。止宿名主庄左衛門」とあるが、忠敬だけは隊員とは別に「太田村、加瀬左兵衛方に泊」と単独行動である。太田村の加瀬家は、忠敬の次女の篠の嫁ぎ先であり、篠の没後も交流が続いていた。九十九里浜を測量すると、連日忠敬ゆかりの地に巡り会う。



日本学士院中図から九十九里

### ○ 大図（千葉県南部 安房）

#### 「自江戸至奥州沿海図 第三〈自吉浜／至御宿〉」

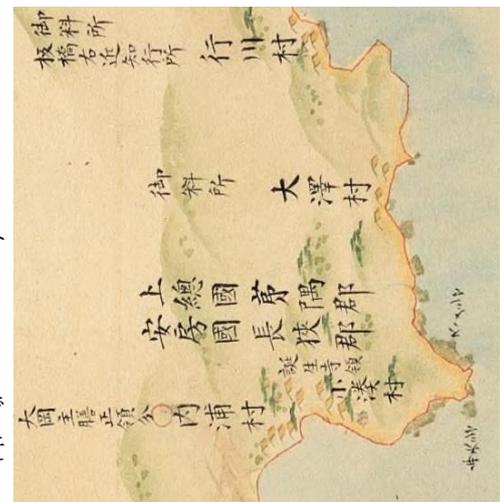
国宝：地図・絵図類 番号59、縮尺36,000分の1、87.3×176.3cm

享和元年6月28日に吉浜村（安房郡鋸南町）から館山、鴨川、勝浦をへて7月12日に御宿に到着するまでの測量成果である。大図の欄外には

「自吉浜 北 三寸〇一厘二毛

至御宿 東 四尺三寸四分七厘」

と大図上の経緯の寸法が墨書されている。図割は最終上呈大図とほぼ同一である。外房の海岸線は断崖絶壁が多い。右図は外房の小湊村（鴨川市）付近である。小湊村は日蓮ゆかりの誕生寺領であった。



国会大図 92 国会図書館デジタルコレクション

○ 「測量日記」(第二次測量の外房測量：享和元年7月9日～15日)

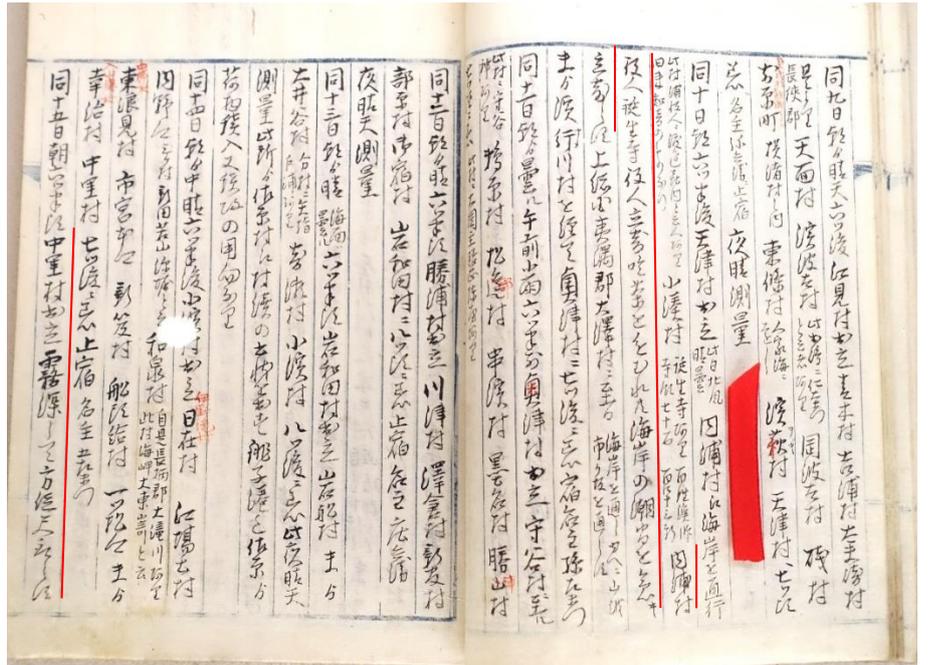
「享和元辛酉歳 沿海日記 完」 国宝：文書・記録類 番号71、23.0×17.0cm

享和元年7月9日から15日までの『測量日記』が展示されている。

7月10日の『測量日記』には、内浦村の村役人や誕生寺の役人が誕生寺に立ち寄って「喫茶を進むれ共、海岸の潮間を急ぎ、立寄らず」とある。

最終行には15日に中里村を出立したが「霧深して方位尺取らず」の部分記されている。一部、天井のライトが展示ケースに反射しているがご容赦頂きたい。

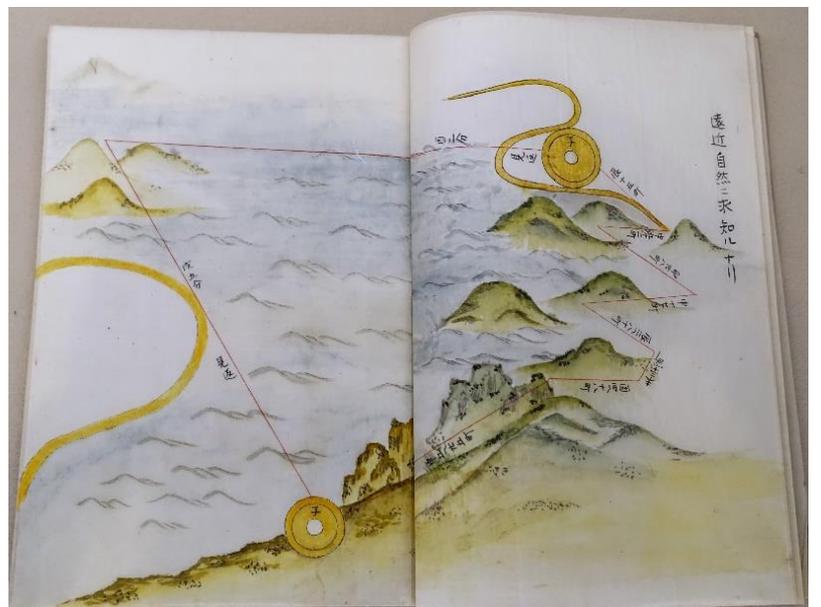
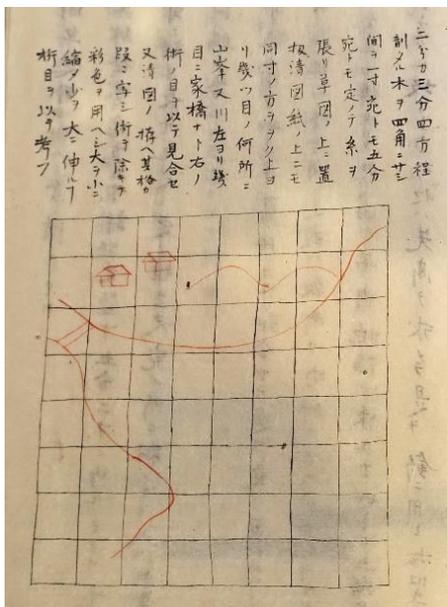
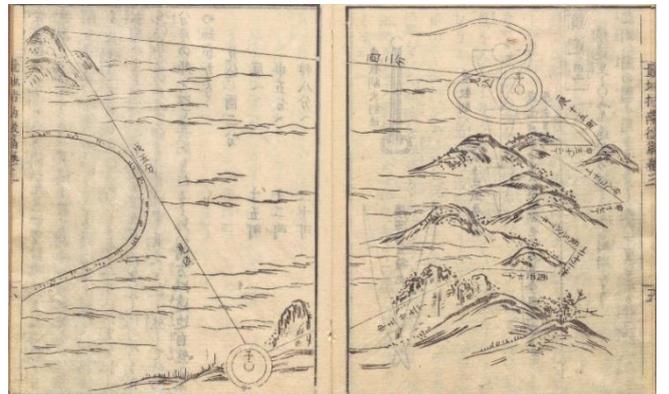
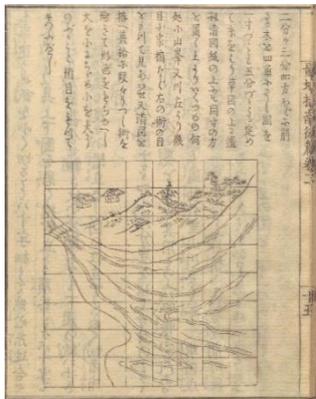
『測量日記』の所々に朱書きで誤字を訂正したり、地名を補ったりしている。



「享和元辛酉歳 沿海日記 完」伊能忠敬記念館蔵 無断流用禁止

○ 「量地指南後編稿卷之二・卷之三」(写本) 国宝：典籍類 番号376・377 27.0×19.0cm

村井昌弘の『量地指南』と『量地指南後編』が公刊されたことにより、江戸時代前半の測量技術が公開された。内容的には佐原時代のものであろう。上段は国立国会図書館デジタルコレクションの刊本で、下段は伊能忠敬直筆の写本の展示部分である。刊本にはない、忠敬が彩色を施した図版が興味深い。



「量地指南後編稿卷之二」 「量地指南後編稿卷之三」伊能忠敬記念館蔵 無断流用禁止

## ○ 特別図（伊豆七島の三宅島）

### 「伊豆国附三宅島沿海地図」

複製（原資料は国宝：地図・絵図類 番号119）

縮尺12,000分の1、86.9×109.0cm

第9次測量の成果である。5日間の「風待滞留」の後、文化12年5月18日に「今朝北風烈」ということで下田を出帆した。船は「中開き帆三百石観音丸。船頭、楫取、水主六人」で、八丈島を目指した。ところが19日未明に逆風になり、いったん三宅島に上陸した。翌20日は「海岸波立」ということで三宅島に滞留して測量し、21日に八丈島に渡海した。八丈島測量を終え測量隊は6月29日に三宅島に向かったが、途中で風がやみ黒潮に流され「都合四日三夜洋海に漂流す。可<sub>レ</sub>恐急潮の舟行也」となり、「房州沖合十里」ばかりのところから三浦半島の三崎湊に戻った。その後、御蔵島測量を終えて7月21日から三宅島測量を再開した。



複製「伊豆国附三宅島沿海地図」伊能忠敬記念館蔵 無断流用禁止

三宅島は日本有数の火山島であり、噴火の度に形を変えている。右図の「新ミヨ池」については7月25日の『測量日記』に新御洞（ミヲ）池と記し、清水溜であり一周凡五町ばかりとする。さらにこの池は52年前（宝歴13年）の「山燃」のときに出来たもので、池の周りはずべて焼石であると記録している。国土地理院の火山土地条件図「三宅島」の地形解説によると、1763（宝歴13）年の噴火でできた爆裂火口が新霽池（しんみょういけ）と呼ばれる池となっていたが、1983（昭和58）年の噴火で水蒸気爆発が起こり池は消失したという。地理院地図で確認すると今は「新霽池跡」と記されている。



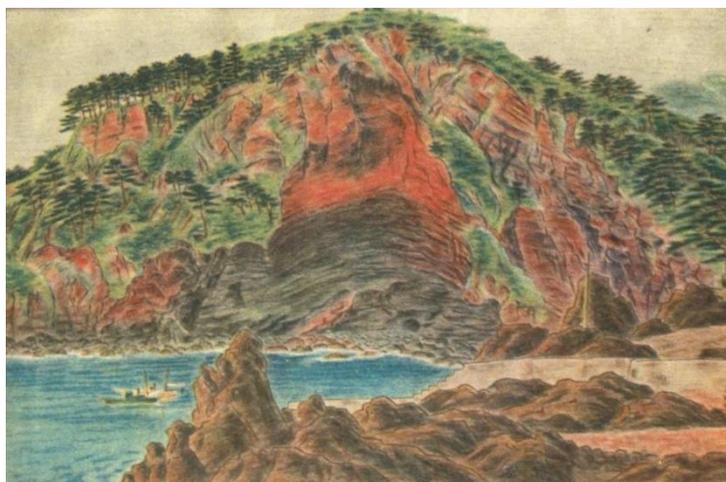
複製「伊豆国附三宅島沿海地図」から新霽池  
伊能忠敬記念館蔵 無断流用禁止

下の左図は7月23日に三宅島北部の神着村を出発し三宅島東岸を南下する途中の範囲である。東海岸の太く鮮やかな朱色の測線を追っていくと、測線が入り江を横切りその奥に三日月状の朱に塗られた場所がある。『測量日記』には「坪田村難所となる。字赤バツキョウ、此辺一面焼岩、朱の如く、切立、折々崩」とある。「赤バツキョウ」に現在は「赤場暁」をあてる。赤い海蝕崖に囲まれた入り江で避難港でもあったという。

ところが1940（昭和15）年の山腹割れ目噴火により溶岩流が流入し、湾内でも噴火が起こったため、現在では溶岩台地となっている。測量隊も見たであろう赤い海食崖の姿が、昭和10年の画家加藤洵綾のスケッチ『三宅島 赤場暁』に残されている。画文集『山海画帖』に「燃える朱のような岩肌は見事」と記している。



複製「伊豆国附三宅島沿海地図」から赤場暁  
伊能忠敬記念館蔵 無断流用禁止



加藤洵綾『三宅島 赤場暁』『昭和十五年三宅噴火記録』（1942）所収  
国会図書館デジタルコレクション

○ 特別図（伊豆七島の神津島）

「伊豆国附神津島沿海地図」

複製（原資料は国宝：地図・絵図類 番号122） 縮尺12,000分の1、65.8×100.7cm

三宅島測量を終え、12日間の風待滞留をへて神津島に渡ることが出来た。神津島は砂浜もあるが、『測量日記』には「絶壁舟測」、「岩石上中飯」、此の辺すべて「大尖岩絶壁難所舟測」というような記事が続く。

8月17日には、この日もすべて難所で舟測したが、波が高かったため「竿取引浪に取れ海中落入、暫時水を呑流」という事故も起こった。

下の図はタコ浜（測量日記は太古、現在は多幸をあてる）付近を拡大したものである。神津島最高峰の天上山から500mの白い断崖が砂浜に迫っている。



複製「伊豆国附神津島沿海地図」伊能忠敬記念館蔵 無断流用禁止

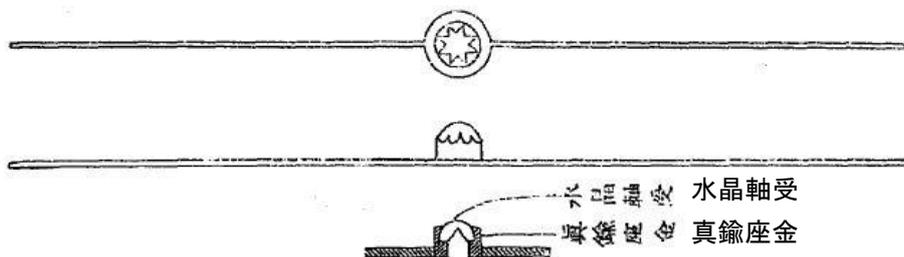
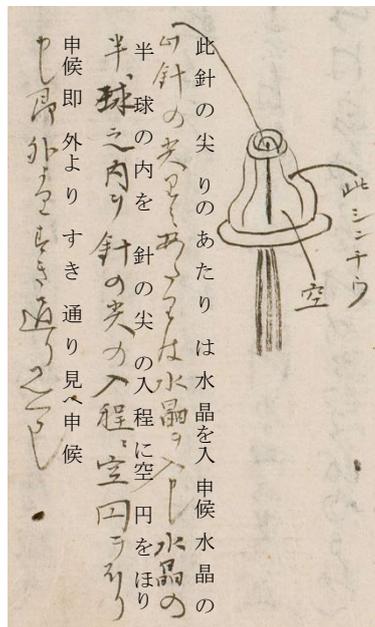
○ 「羅鍼」 国宝番号：器具類 番号9、10、11、12

9番：9.6×0.5×0.4cm 10番：9.5×0.7×0.3cm 11番：9.3×0.5×0.3cm 12番：9.5×0.7×0.3cm



「羅鍼」11番 伊能忠敬記念館蔵 無断流用禁止

方位磁石に使用する磁針である。伊能忠敬記念館が所蔵する18個の羅鍼の内から、通常の細長い針状のもの4個が展示されている。間重富がオランダ製を参考に、軸受けを従来のような真鍮ではなく水晶にすることで摩擦を軽減するなど、より精密なものに改良した。この間の経緯については、『星学手簡下』の間重富が高橋至時にあてた寛政10年3月24日付の書簡が右の図入りで詳しい。『会報』21号に安藤由紀子氏の訳文が掲載されている。下の図は大谷亮吉の『伊能忠敬』による。

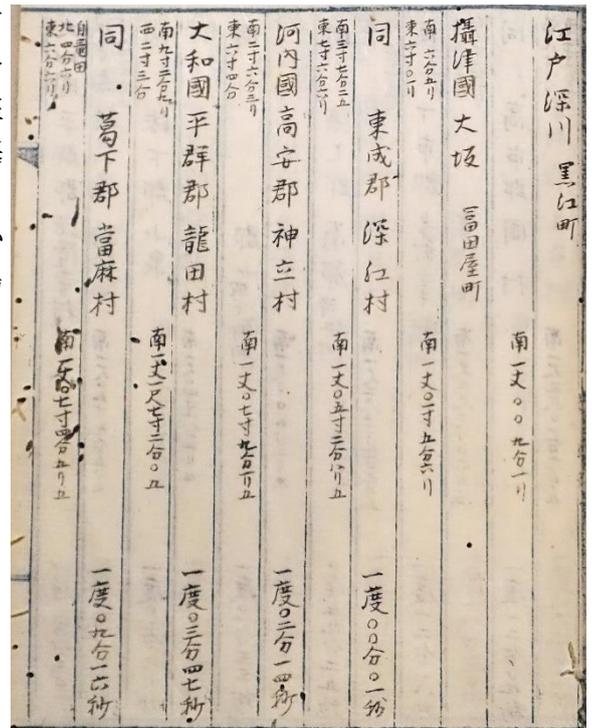


『星学手簡』国立天文台所蔵

○「諸国測量地図北極高度并東西度」 国宝：文書・記録類 番号 150

第六次測量についての性格の異なる数種類の記録が記載されている。なお、東京地学協会HPのウェブ図書室で全文が公開されている。この記録については同種の記録の「文化五年四国及大和測量文化七年九州之一部測量東西及南北距離記」（文書・記録類 番号 174）と併せて、大谷亮吉『伊能忠敬』の626頁、広瀬秀雄「伊能忠敬の全国測量と経度問題」（『伊能忠敬の科学的業績』152頁）が論じてきた。2021年に野上道男「伊能忠敬の測量成果の地図化法」（地理学評論94巻6号）が新しい視点から詳細に解説している。野上は『諸国測量地図北極高度并東西度』は隣接する星測点間の南北成分距離を記述したデータ集であるとする。

右の展示部分では大阪富田屋町を基点とし、大和路をへて伊勢松坂までの各星測点間の東西と南北の成分距離が記録されている。最初に江戸深川黒江町の忠敬の観測所を座標の原点とし大阪富田屋町の間重富自宅の観測所までの大図縮尺の南北成分距離が「南一丈〇〇九分一リ」と記され、深江町以下各星測点についても同様である。基点から次の星測点深江村までの成分距離「南六分五リ 東六寸〇一リ」と記されており、各星測点間の成分距離をそれぞれ累加すると大阪富田屋町からの各星測点の座標値が得られる。また南北座標については江戸深川黒江町を基点とする値も得られる。



「諸国測量地図北極高度并東西度」  
伊能忠敬記念館蔵 無断流用禁止

同様に浜松城下の旅籠町を基点として姫街道の各星測点から御油までの同様のデータ、明石郡大蔵谷を基点として淡路島の各星測点を一周するデータ、四国沿岸の各星測点を一周するデータが記載されている。

この外に、この文書には次のような記録を載せている。

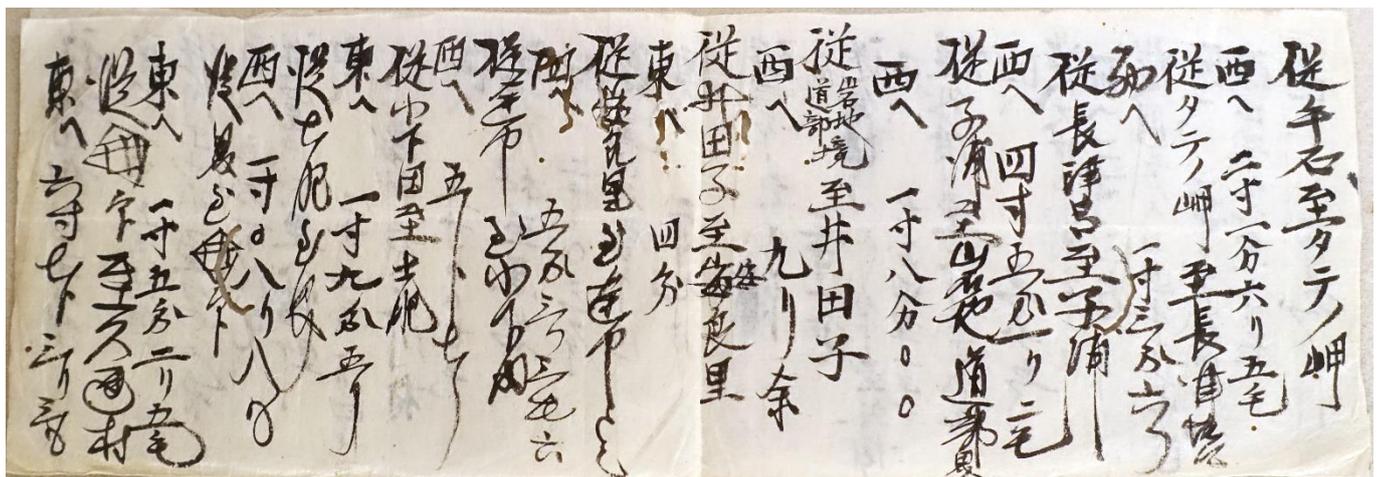
- ・「文化五戊辰年 四国并淡州及大和路大図面経緯寸法記」
- ・「大図一里三寸六分表題 淡路国及四国沿海」（一図～十七図）
- ・「自大阪歴大和至伊勢街道」（第一図～第四図）
- ・第六次測量に関する作成物の一覧

- 内訳は大図・中図 27 枚
- 大阪から瀬戸内の船路図 1 枚
- 北極出地度里程記 1 冊
- 淡路と四国の沿海風景 11 巻

○ 製図用記録 国宝：文書・記録類 番号 473 24.8×34.4cm

法量 24.8×34.4cm とあるが、半紙サイズを下の方で折り返しているの裏面にも記録がある。学芸員さんによると横帳の様に折ってはあがるが綴じた痕跡はないとのことである。

記録は裏面から始まる。伊豆半島北東岸の和田村から川奈村、川奈村から富戸村というように南下する 12 地点間の東西方向の大図縮尺の距離の記録である。展示面は伊豆半島南端部の千石村から西岸を北上して久連村までの 12 地点間の東西方向の大図縮尺の距離の記録である。合計 24 地点記載されるが、下田は含まれず、星測地や宿泊地とも限らない。なかには大図にも記載されないレベルの村界や 3 個所の測量杭もある。



製図用記録 千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵 無断流用禁止

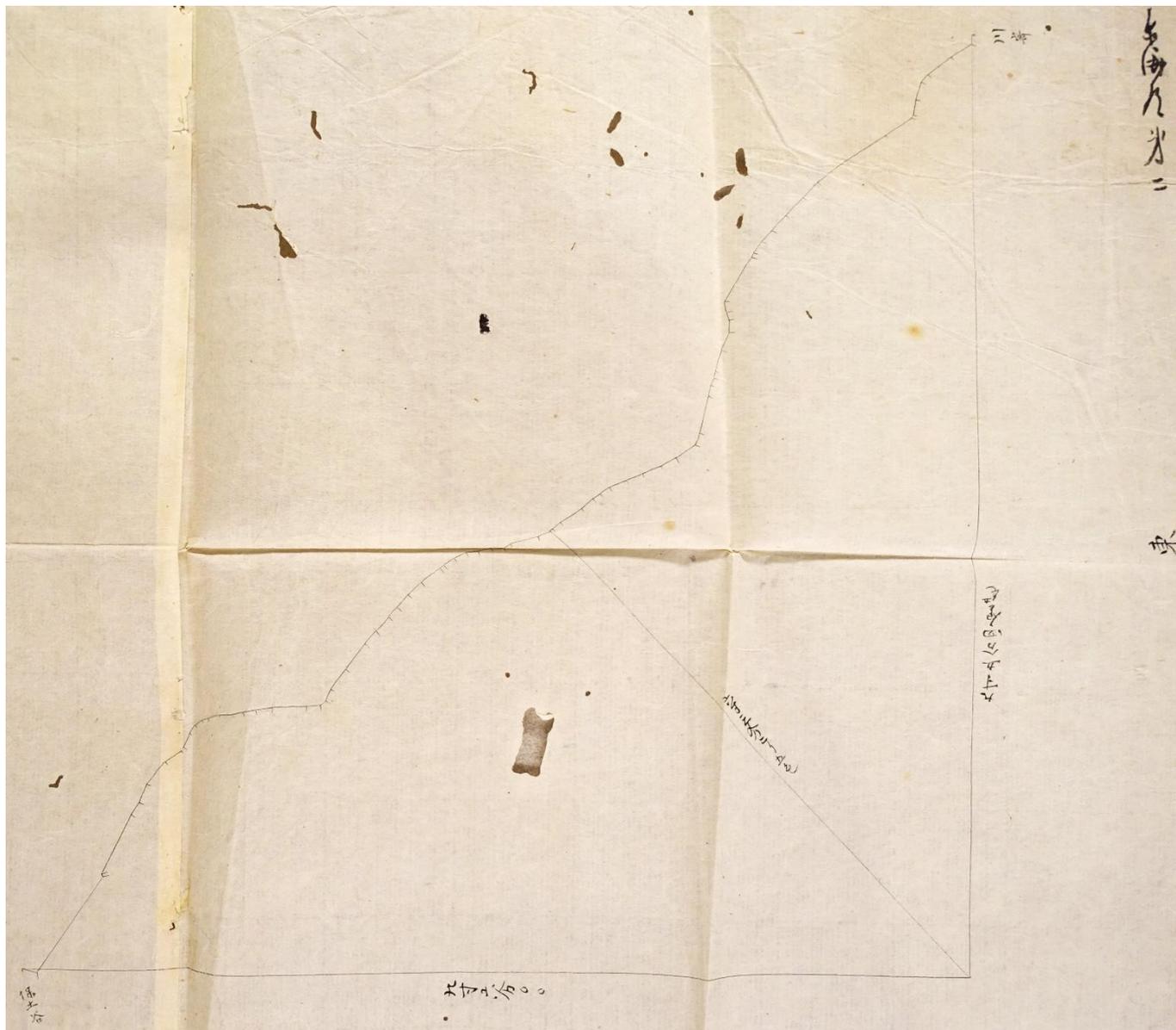
## ○ 小区域下図（東海道：川崎宿～保土ヶ谷宿）

### 「自武蔵国橋樹郡川崎宿至武蔵国橋樹郡保土ヶ谷宿下図」

国宝：地図・絵図類 番号170 縮尺36,000分の1、47.2×61.2cm

図の右上に「東海道第二」と標題のある下図である。墨書部分に「二月二十六日分」とあることから、第4次測量往路の享和3年2月26日に川崎宿を出立し保土ヶ谷宿まで測量した成果であるか、第5次測量往路の文化2年2月26日に宿所の川崎から六郷川（多摩川）川端まで戻り、そこから測量を始め、保土ヶ谷宿まで測量した成果であるか両方の可能性がある。また、「五月十日始源図」（「縮」の上に「原図」の意味で「源」と加筆したか）については、享和3年5月10日の『測量日記』に、大雨のため尾張の大室新田に逗留して「地図を成」と記されていることに符合する。ところが第5次測量の文化2年5月10日の『測量日記』にも鳥羽で、「高橋、平山は直に石鏡村に至て地図をなす」とありこれも符合する。手掛かりとなる二つの日付によっても、第4次測量か第5次測量か絞りきれない。

下図自体は測線と両端末の「川崎」と「保土ヶ谷」、図上の距離が記されているだけで、途中の地名も方位線もないシンプルな下図で同時に展示されている他の下図とは様相が異なる。東西方向と南北方向の図上距離に対し、斜めの図上距離は何のためだろうか。「以恭尺、作之」の「恭尺」が意味不明であるが、「平恭図」を平山郡蔵の実名である「平山季恭」を中国風に「平恭」と略したとすれば、平山郡蔵の所持する尺を使用したことを注記したということになる。



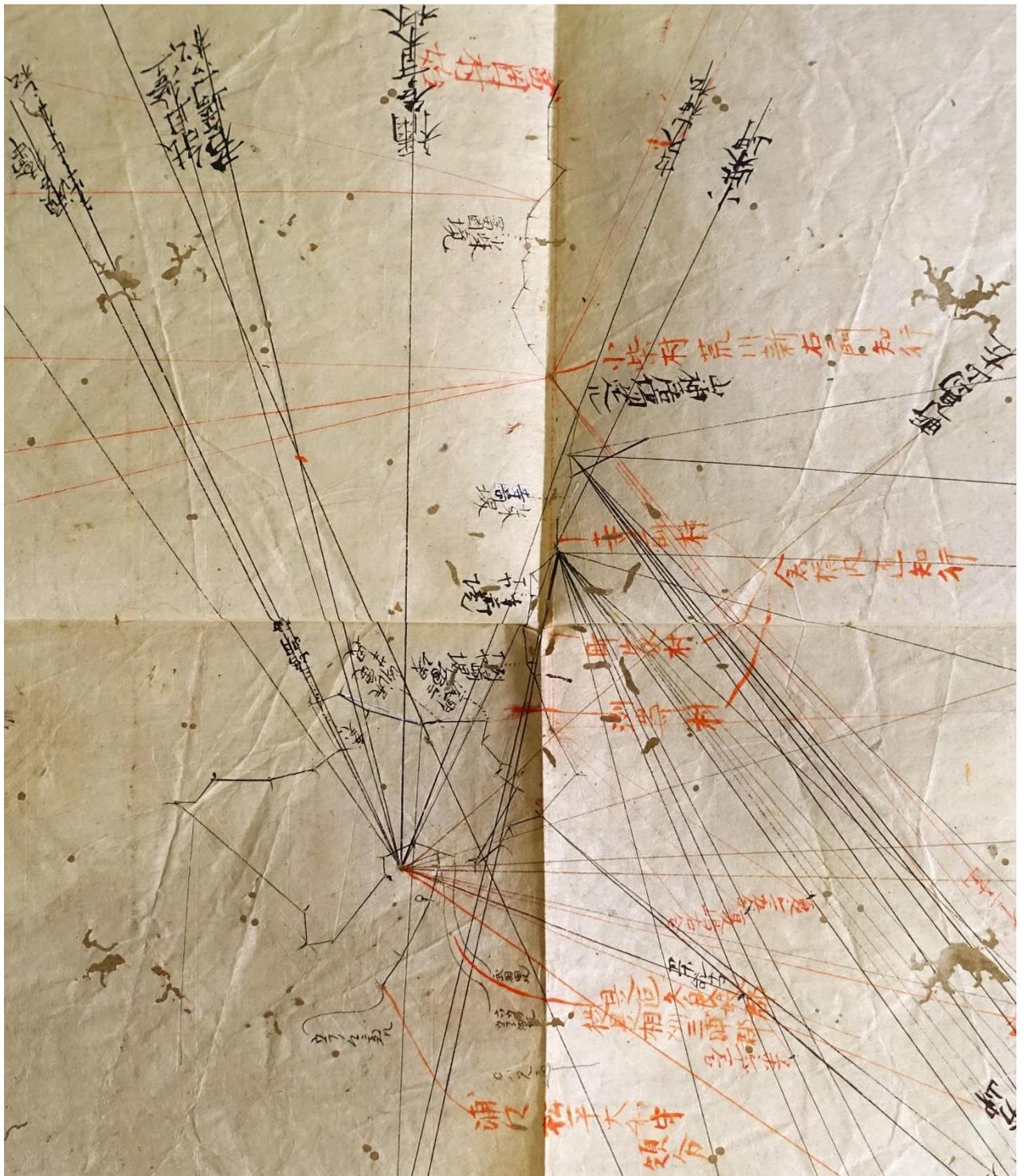
東海道第二

## ○ 小区域下図（金沢八景：神奈川県横浜市）

### 「自武蔵国久良岐郡富岡村至相模国三浦郡浦郷村下図」

国宝：地図・絵図類 番号 171、縮尺 36,000 分の 1、法量 45.8×32.3cm

金沢八景として有名な景勝地の小区域下図で、第2次測量中の享和元年4月9日と10日の測量範囲が描かれている。『測量日記』によると9日に富岡村を出発し、能見堂まで測量し、擲筆山地蔵院から「所々測量」して町屋村に宿泊した。10日には一覽亭に上がり測量し、浦郷村に止宿した。下図は「富岡村始」という朱書から始まり、墨線の測線は南下を始める。村名や領主名は朱書で、国界や村界は細字で墨書している。測線の最後は「浦郷 松平大和守領分」と朱書している。ところがこの下図には、『測量日記』に記載された「能見堂」も「擲筆山地蔵院」の名称もなければ、方位線も1本も無い。「一覽亭」の方には文字はないが、朱や墨で多くの交会線が引かれ方位測量をしたことがわかる。この下図は山、岬、島に向かっておびただしい数の朱線と墨線の交会線が引かれており、測線をたどることを難しくしている。画像を反転すると、裏面には「三」と墨書され、「從富丘及二町や至浦郷」（富岡村、町屋村）と範囲が朱書されている。裏面に△の中に数字の墨書がある下図は江ノ島や伊豆半島の小区域下図として13枚が残っている。



「自武蔵国久良岐郡富岡村至相模国三浦郡浦郷村下図」から測線部分 伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

○ 小区域下図（三浦半島南西側海岸：神奈川県三浦市）

「自相模国三浦郡宮川村至相模国三浦郡下宮田村下図」

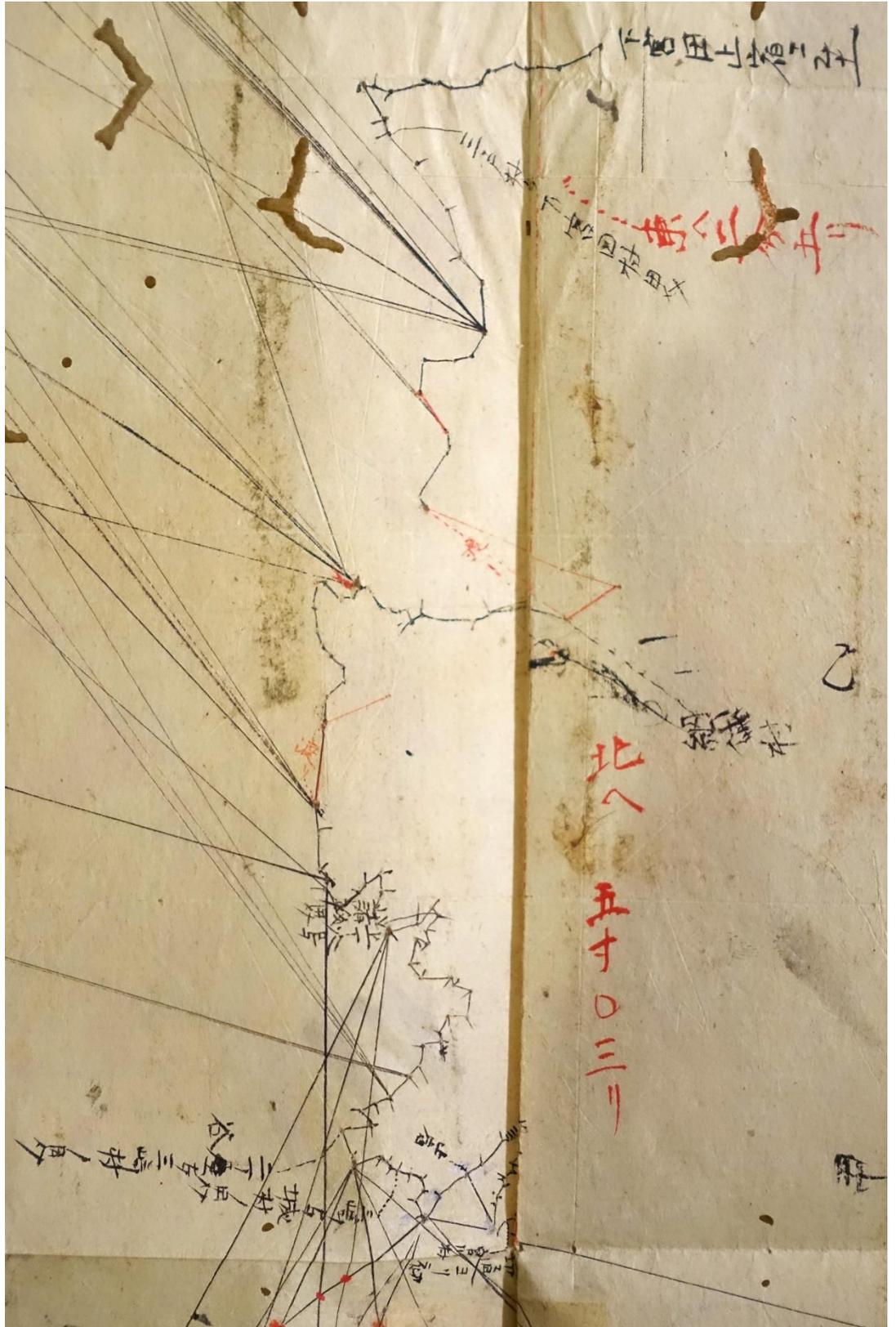
国宝：地図・絵図類 番号 172、縮尺 36,000 分の 1、法量 46.7×46.7cm

第 2 次測量中の享和元年 4 月 15 日と 16 日の測量範囲が描かれている小区域下図。下図の南側の「切通ヨリ初」から墨書された測線は始まり、三浦半島の西海岸を北上して「下宮田止宿ニ至」で終わる。『測量日記』によると、城ヶ島役人が舟行も成らず道も無いというので、城ヶ島については「遠見遠測」になった。この下図には朱線が二箇所にはひかれており、それぞれ「渡」と朱書している。油壺湾や、小網代湾では湾奥まで測量することが出来なかったようである。国会大図やアメリカ大図においてもこの場所は測線が繋がっていない。図の末端同士的位置関係が「東へ二分五リ」「五寸〇三リ」と朱書されている。

この下図の裏面には「従三崎切通下宮田村迄」「五番下」「不用見合ニすへし」とあり、使われなかった下図のようである。

記念館には同名の「自相模国三浦郡宮川村至相模国三浦郡下宮田村下図」（地図・絵図類 173）があり、こちらには「本図」「九」と墨書されているとのことなので、こちらが完成版のようである。両者を比較してみたいところである。

この下図は白径も確認することが出来る。



「自相模国三浦郡宮川村至相模国三浦郡下宮田村下図」から測線部分  
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

## ○ 小区域下図（東京湾北岸：東京都江戸川区・千葉県浦安市と市川市）

### 「自下総国葛飾郡湊村至武蔵国葛飾郡小松川新田下図」

国宝：地図・絵図類 番号 511、縮尺 不明、法量 56.0×64.0cm

『伊能忠敬関係資料目録 | 下図』（伊能忠敬記念館、2005）では江戸府内下図に分類し、縮尺 12,000 分の 1 とする。しかし江戸府内図は中川までが描画範囲であり、中川より東、浦安、行徳方面を描くこの下図は江戸府内下図には該当せず、第 2 次測量の享和元年 6 月 19 日の測量によるものである。

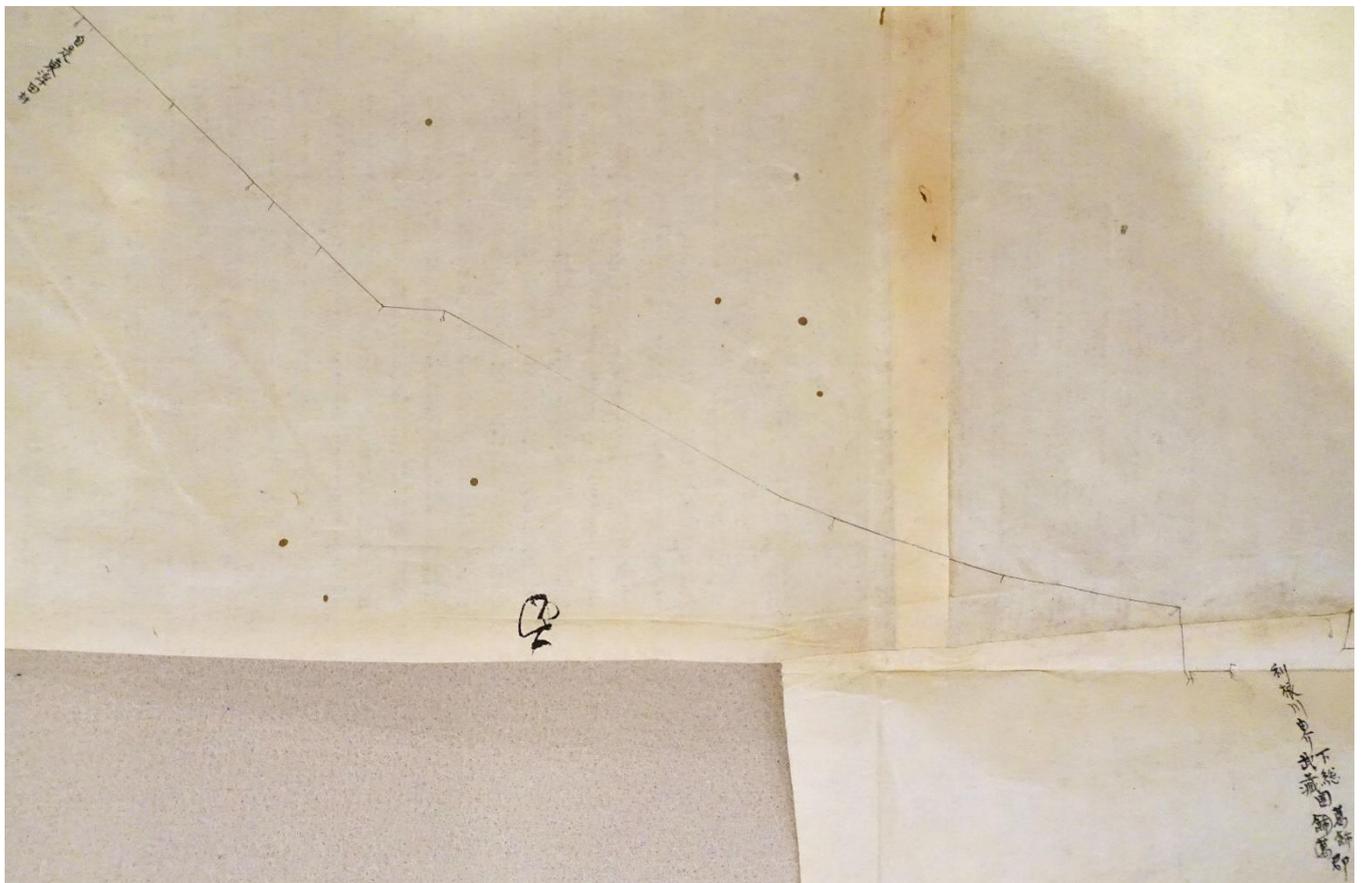
深川黒江町を出発して小名木川沿いに東に進み中川を渡る所から下図は始まる。利根川の東遷以降、関宿以南を江戸川あるいは利根川の両方の呼称が使われているが、『測量日記』や伊能図では「江戸川」ではなく「利根川」の方を使っている。

前日に忠敬が出した泊触では「海辺に沿、船橋泊に致」と記したが、学士院中図を見ると中川から利根川（江戸川）河口にかけて、とても海辺を測量することが出来なかったことがわかる。同年 7 月 2 日付けで高橋至時が忠敬に送った書状

（国宝：書状類 270）では、中川より先、蘆原、小竹原等には大いに御手間取りの旨、御難渋の程御察し申し候と慰労している。『測量日記』にも「測量も尺取らず、方位も密ならず」と記している。測量は大幅に遅れ、急遽、宿泊予定の船橋を行徳本村泊まりに変更したが、荷物は船橋に送ってしまったので着替えにも困ったと記す。下図は東浮田村から江戸川河口の「測量も尺取らず、方位も密ならず」という部分である。梵天間が異様に長い区間がある。



日本学士院中図から江戸川河口部



「自下総国葛飾郡湊村至武蔵国葛飾郡小松川新田下図」から東浮田村から江戸川河口

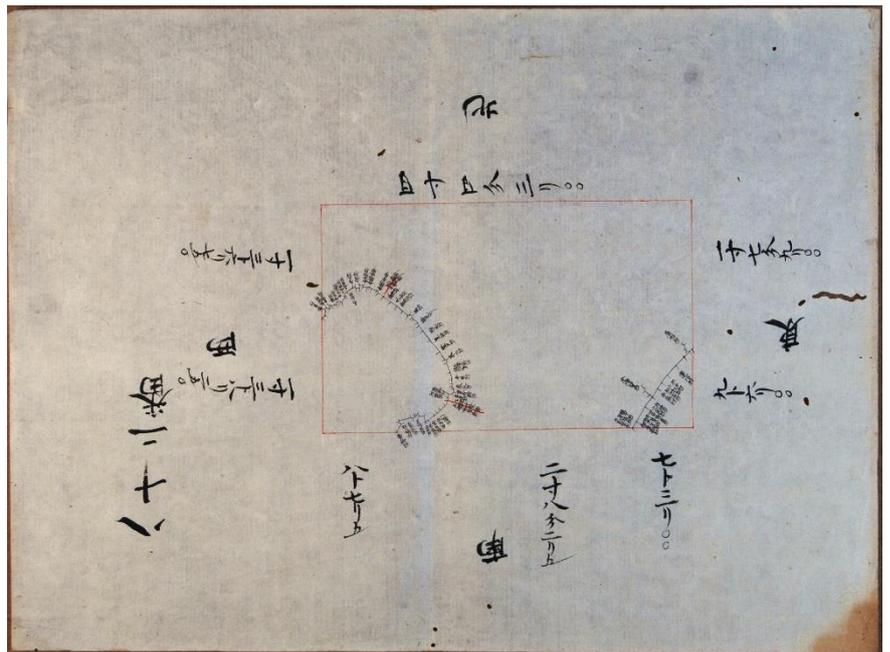
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

伊能忠敬記念館が所蔵する下図は国宝に指定された 399 枚以外にも、指定外の下図 14 枚を所蔵している。その内、及川家文書として分類されている下図が 13 枚あり、今回は 4 枚が展示されている。及川家文書は平成 18 (2006) 年 5 月に寄贈されたもので、当時の地元新聞記事によると「骨董品収集が趣味の父が昭和 10 年代に入手」したものとのことである。伊能家伝来のものではないためか、平成 22 年の国宝「伊能忠敬関係資料」(2345 点) の指定からはもれている。

会報 98 号で星莚由尚ほかによる『東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」と三康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」』で紹介されたように、及川家文書の下図 13 枚は小図の縮尺で描画範囲が大図図郭と一致することなどの点で、東京大学総合図書館所蔵の「測地原圖」のうちの 56 枚、三康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」のうちの 24 枚、神戸市立博物館所蔵の「測量図」1 枚と同じ様式で作成された一連のものといえる。

○「八十二番（自上総国武射郡屋形村至下総国葛飾郡猫実村下図）」（下総）  
及川家文書 13、縮尺 432,000 分 1、23.3×31.4cm

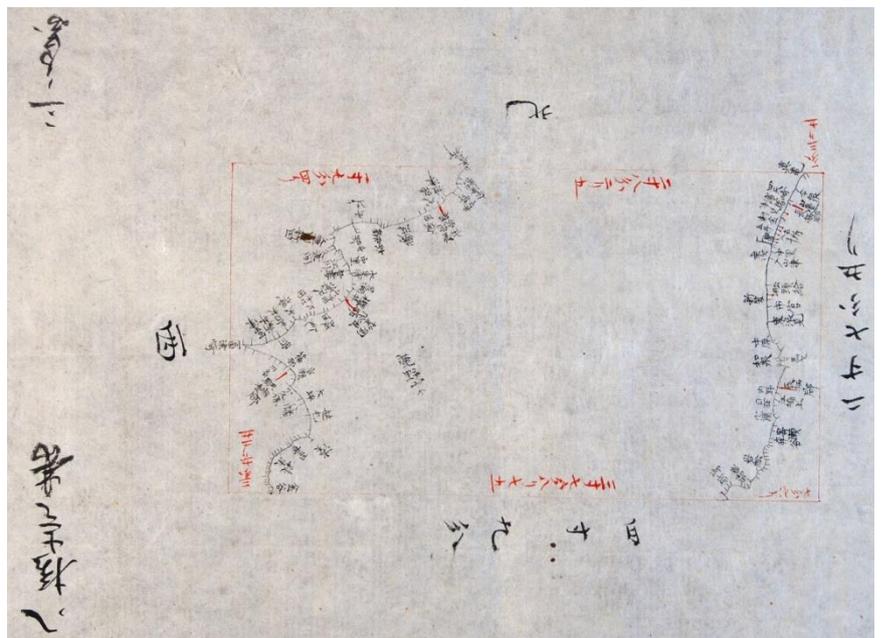
伊能忠敬記念館の文化元年上呈の大図とは図割が異なり、最終上呈版の大図第 89 号（船橋）の範囲を縮尺 432,000 分の 1 の小図に縮図した下図である。表面に「八十二番」と大書し、図郭は朱書、測線は墨線、郡界に朱線が引かれている。交会線はない。図郭と測線の接点については図上の寸法が墨書されている。南側では「八分七厘五」「二寸八分二厘五」「七分三厘〇〇」と墨書され、合計値は図郭北側の「四寸四分三厘〇〇」と一致する。



「自上総国武射郡屋形村至下総国葛飾郡猫実村下図」全体  
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

○「八十壱番（自上総国山辺郡真亀村至同国市原郡青柳村下図）」（上総）  
及川家文書 12、縮尺 432,000 分 1、23.3×31.4cm

最終上呈版の大図第 91 号（木更津）の範囲を縮尺 432,000 分の 1 の小図に縮図した下図である。表面に「八十壱番」と大書し、「三分図」と注記している。三分図とは長さ一里を三分に縮小した縮尺 432,000 分の 1 の小図を意味する。図郭の東西方向、南北方向の寸法が墨書され、その内訳の寸法が朱書されている。この点などが「下図 八十二番」「下図 八十番」とは異なる。字体も異なる。

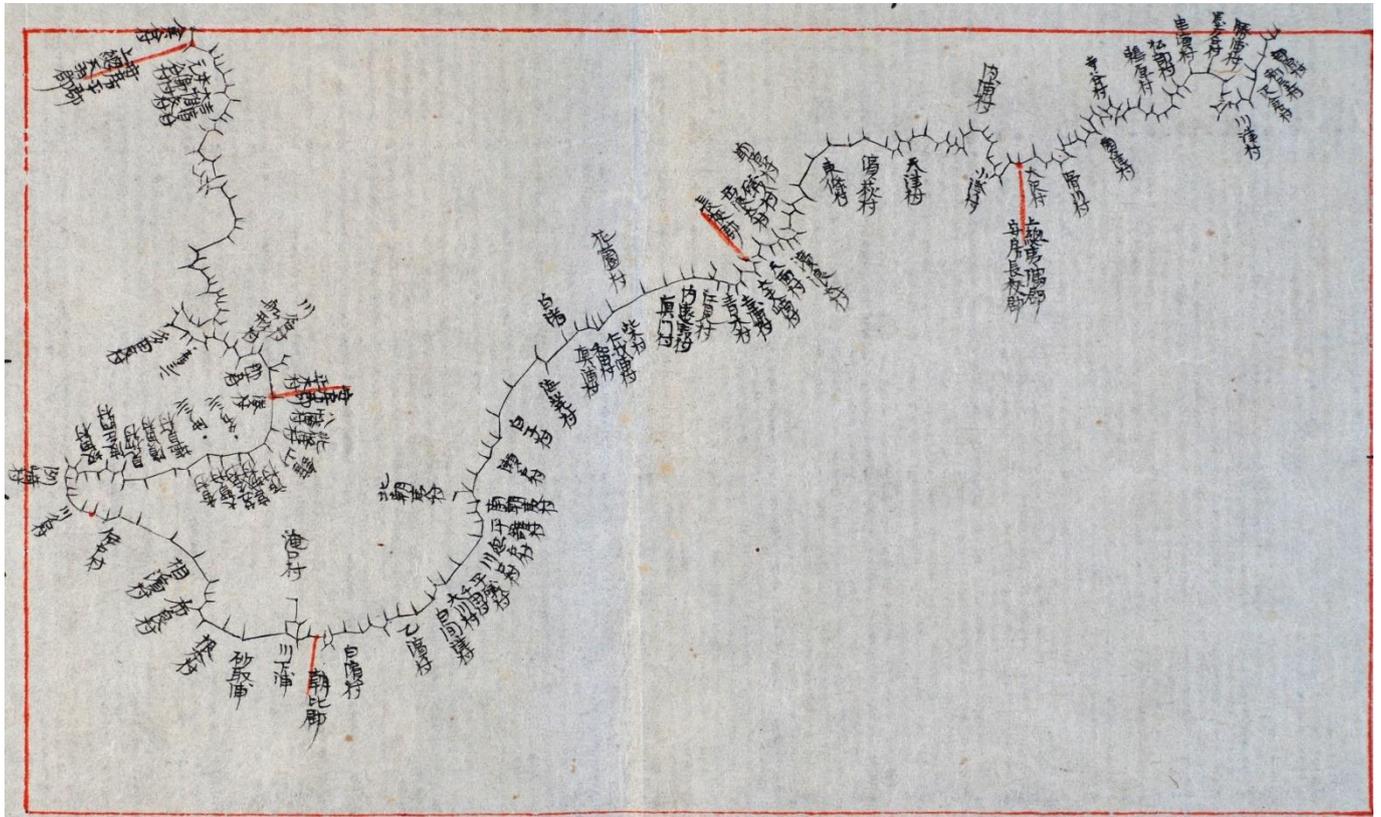


「自上総国武射郡屋形村至下総国葛飾郡猫実村下図」文字部分  
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

○ 「八十番（自上総国夷隅郡勝浦村至同国天羽郡金谷村下図）」

及川家文書 11、縮尺 432,000 分 1、23.3×31.4cm

最終上呈版の第 92 号（館山）の範囲を縮尺 432,000 分の 1 の小図に縮図した下図である。表面に「八十番」と大書し、図郭は朱書、測線は墨線、郡界に朱線が引かれている。交会線はない。図郭と測線の接点の図上の寸法が墨書されている。



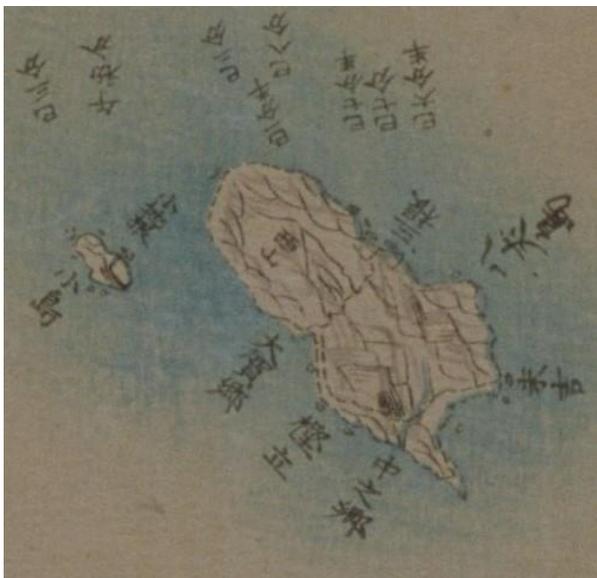
「八十番（自上総国夷隅郡勝浦村至同国天羽郡金谷村下図）」図郭部分  
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

○ 「七拾五番下（八丈島下図）」

及川家文書 7

縮尺 432,000 分 1、23.4×31.3cm

描画範囲は大図第 105 号（八丈島）の範囲を縮尺 432,000 分の 1 の小図に縮図した下図である。朱点は村界を示す。



「官板実測日本地図（一）」  
国立公文書館デジタルアーカイブ



「七拾五番下（八丈島下図）」測線部分  
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止